

島々の歴史

——有吉佐和子『恍惚の人』『日本の島々、昔と今。』——

村上 祐紀

一、島々の歴史

有吉佐和子は、「はなはだ不人気な作家¹⁾」である。「地唄」(『文学界』一九五六年一月)が芥川賞受賞を逃して以来、『華岡青洲の妻』(一九六七年二月、新潮社)でこの年の三月、第六回女流文学賞を受賞するまで、いわゆる文壇における賞とは無縁の作家であった。とりわけ、文壇の文士たちからの評価は低く、ブームとなった「才女」というイメージも「新人女性作家をメディアに載せるための戦略の一つにすぎ」なかつたという²⁾。一方で、発表される作品は次々と舞台化、映像化され、介護問題を扱った『恍惚の人』(一九七二年六月、新潮社)や公害問題を提起した『複合汚染³⁾』をはじめ、多くのベストセラーを生み出した。

有吉佐和子の作品には、いくつかの共通テーマが存在するが、その中に離島問題を扱った作品群がある。「忘れられた離島」黒島を舞台とした『私は忘れない』(一九六〇年三月、中央公論社)や伊豆七島の御蔵島を舞台に安保条約にかかわる問題を扱った『海暗』(一九六八年一〇月、文芸春秋)などの小説がある一方、亡くなる三年前には『日本の島々、昔と今。』(一九八一年四月、集英社)を

出版している。『日本の島々、昔と今。』は、一九八〇年一月から「すばる」に全十二回連載されたルポルタージュである。北の焼尻島、天売島から南の与那国島まで、有吉は実際に島を訪れ、役場や漁協の人々から話を聞くことによって、その島の抱える問題を把握していく。そうした中、多くの島の主要産業は水産業であり、中国や台湾との領海権の問題など、日本の「辺境」が抱える問題が浮き彫りになっていくのである。作中からもうかがえるように、島で生きた情報を集める「私」の熱意は並々ならぬものであり、有吉は「小説書きでなければ書けないルポ⁴⁾」を目指していたという。では、ここまで有吉を駆り立てた島々の歴史とは、有吉にとって、あるいは同時代においてどのようなものだったのだろうか。その手掛かりとして、考えてみたいのは例えば次のような描写である。本連載の最初の取材先である北海道の焼尻島・天売島からの帰りの船中、「私」の島に対する認識は以下のように述べられている。

私は帰りの船の中で、海を眺めている私の眼が、きつともう色を変えているだろうと思った。日本は島国で、大陸の国々の国境紛争について理解することが出来ない日本人が多かったのだ⁵⁾が、二百カイリや大陸棚などの主張が出てくると、海は国境になつたと言っているのだらう。日本にとつて、今や海は国境だ。

この新しい認識が、私にとって最も大きな収穫であった。

「出かけて行って実際に島を見ること」により、本連載の始まりには「海は国境になった」という認識を獲得したことが述べられている。これ以降、有吉は「国境」の問題として離島をまなざしていくことになるわけだが、ここでこうしたまなざしが「新しい認識」と表現されていることに着目したい。いったい何が「新しい」のか。

一方、「出かけて行って実際に島を見ること」が、どれほど大きな収穫になるか、この一年間の島めぐりで私は知り尽くしていたものの、実際に上陸することはかなわなかった島もある。竹島であり、尖閣諸島である。尖閣諸島の上陸をあきらめ、魚釣島の上空までヘリコプターで飛行した有吉は、改めて「ただただ」そこに石油がある」と言われたのだ。ことを発端とする、この島の歴史性を考えるに至る。その問題は現代にも通じるものであり、その点において有吉の作家としての先見性が注目されてきた。本作に限らず、社会問題を先駆的に見出し、それを面白く読ませる「ストーリーテラー」という評価は、良い意味も悪い意味も込めて、有吉についてまわる⁵⁶ことになる。しかし、こうした評価は「いわゆる純文学の書き手からはむしろ軽蔑される風潮があり」、有吉佐和子の書き手としての評価にはつながっていない。たしかに「ストーリーテラー」としては優れた書き手であるが、それらの作品は「純文学」としては未熟である⁵⁷と見なされていたわけである。有吉自身も、「ストーリーテラー」という批判には当然不満があったようで、自身の作品の題材について、次のように述べている。

ずっと前に、ある評論家が私の作品を「この作家は嫁姑とか安

保条約とかのカレント・トビックスを巧みに料理して書くが

……」と非難がましく批評していたのを思い出して、更に唇の寒い思いをしている。いったい嫁姑の争いがカレント・トビックスかと聞き直りたかったし、『海暗』を書いたのは安保反対ムードが台頭して十年もたつてからのことである。(中略) しかも主題は総て私の躰から湧き出たもので、どれもこれも現代を生きている私と直接かかわりのある重大な問題なのだ。しかも

現代だけでなく将来も、人間の根底にあるものとして決してcurrentではない筈のものだ。『恍惚のひと』をもしカレント・トビックスだと言う人間が出てきたら、私はとても温和しくしていられないだろうと思う⁵⁸。

有吉作品で取り上げられる話題は、「私と直接かかわりのある重大な問題」であり、「現代だけでなく将来」に関わる問題である。その意味において、有吉は決して「過性の「カレント・トビックス」を取り上げているわけではない。結論を先取りするならば、「島」や「公害」「介護」「女性」など、有吉作品に選択された題材には、有吉の個人的な関心にとどまらない歴史的な必然性があると考えられる。その必然性は、『日本の島々、昔と今』で示される「新しい認識」、その新しさとも無関係ではない。

このような関心のもと、以下では、有吉作品の中でも最もリアリティをもって受け止められた『恍惚の人』をとりあげてみたい。というのは『恍惚の人』は社会現象にまでなった作品であるが、それは単に「ストーリーテラー」の本領を発揮して「カレント・トビックス」を巧みに取り上げたからでは決してなく、同時代において「老

い」を巡る「新しい認識」を示した、有吉のまなざしの「新しさ」にかかわるものだと考えられるからである。では、それはいかなる点において「新しい」のか。本論では、その「新しさ」を正確に見定めることで、毀誉褒貶にさらされてきた有吉のまなざしを正確に、あくまでも歴史的なものとして見定めてみたい。「ストーリーテラー」として貶めることも、あるいはその先見性を今日から発見してもはやすことも、結局は同じことのはずであるから。

二、「恍惚の人」発見

老人介護というテーマを扱い、その描写のリアリテイが評価された「恍惚の人」は、「年齢、男女を問わず、人々の間に広く読まれ」、「中でも昭子・信利夫婦と同年配にある中高年世代の関心はひときわ高く、「恍惚」という言葉は人々の間にまたたく間に広まった」という。その影響は小説レベルにとまらず、「この『恍惚の人』がベスト・セラーになると機を同じくして、一九七三年四月に、総理府に「老人対策本部」が設置され、首相の私的諮問機関として「老人問題懇談会」が設置され^⑤たというように、現実世界にも影響を与えることになった。「この小説を読んだものなら、誰も素直に懐く結論的な感想は、茂造老人のような恍惚の人になるのはいやだ、茂造老人のような恍惚の人を家庭の中に持つ主婦にはなりたくないものだ^⑥」と老いへの過剰な恐怖を感じさせる小説として批判される一方、近年ではそうした描写自体を老いへの警鐘を鳴らす「小説装置の目論見」^⑦だったと評価する見方も提出されている。

『恍惚の人』は、杉並区に住むサラリーマン家庭が、離れに住んでいた父親の介護に見舞われる様子を一年半にわたって描いた物語である。「デパートの大きな買物袋を両手に提げ、地下鉄の階段を上ると、青梅街道にはちらちらと雪が舞い始めていた」という雪の日から始まり、父親を看取るまでが描かれる。父茂造がいつから毫碌していたのかは定かではないが、それが明らかになるのは、茂造の妻である母親の突然の死によってである。この日から、「共働きであるのと茂造が人一倍気難しかった為と両方で、世間の風潮通りの核分裂をしていた」立花家において、父親の介護が始まる。当然のことながら、介護は立花家にとって初めての出来事である。そのため、主な視点人物である主婦昭子を中心に、立花家の人々は様々な「発見」をしていく。その「発見」の意味を見極めていくことが、有吉の新しさを考察することにつながっていくはずである。

茂造の老いの進行を目の当たりにするにつれ、昭子たちは様々な知識を獲得していくが、その「発見」の一つが、老人クラブとの出会いである。昼間茂造を預ける場として見つけた老人クラブは、「こんなところに、いつからこういうものがあつたのかと目を疑いたくなるような建物が、歩いて十分もかからない児童遊園地の隣に建っていた」と述べられるほど、立花家にとってこれまで縁のない場所であった。それはおそらく、多くの『恍惚の人』の読者にとってもそうであっただろう。実際、作中では老人クラブの活動や役割が昭子たちの目を通して、具体的な説明がなされている。「役所所の福祉課の指導で、もう十年以上も前から足立して」いること、「杉並区全体で六十もあり、「全国で四万」あること、玄関には「同じ

仲間だ輪をつくれ 老人クラブはみんなの広場」とはじまる「老人の歌」が貼られていることなどである。

昭子や信利は老人クラブと関わっていく中で、「年寄りといっても本当にいろいろだ」ということを「発見」する。それは老人クラブの出来事にとどまらず、昭子の職場の上司や後輩、近所の人たちの話を通して語られていく。例えば、上司は自身の介護体験を「まあ、二、三年だよ、保つても。僕の親爺もそうだった。昼飯を食べ終ったとたんに、昼飯はいつ喰わせるんだって訊くんで、女房が往生していたよ。世間からわざと食べさせないように思われると言つてこぼしていた。うちの場合は、それから二年で死んだね」と語り、これから介護が待ち受けている昭子に対し、「それは大変だねえ。それは君、本当に大変だよ」と経験者の立場から「大変」を繰り返す。後輩の状況はもつと「大変」である。祖母について「何でも捻るんです。水道の蛇口でも、ガス栓でも。(略) 私たち交替で番をしてたんですけど、本当に油断も隙もないんですよ」と語り、「ずっと病院で流動食をゴム管で鼻から通して」生きていく状況に、「ただただお金がかかるだけ」と述べる。彼女は結婚を考えている相手がいるが、祖母の介護を抱えているという状況に結婚を踏みとどまっているということも明らかにする。昭子はその話を聞き、「よりよつてこの法律事務所には人間がたつた四人しかいないのに、そのうち三人が耄碌した老人と共に暮した経験があるか、あるいは今は今も悩まされているというのだ」と思うに至る。

信利が「耄碌している父親は、信利がこれから生きて行く人生の行きつく彼方に立っている自分自身の映像なのだという考え」を持

つたように、老いの問題は昭子たちに自分自身の問題として考えさせずにはおかない。我々がこれから呆けないためにはどうしたらよいかという問題である。そのことについても、本作は一つの解決策を示してくれている。昭子に「齢をとるのか、私も」と思わせるきっかけとなるのは、近所の「門谷のお婆ちゃん」である。「門谷のお婆ちゃん」は最初色々茂造の世話を焼いていたが、ある日「人間もあんなっちゃおしまい」と昭子にまくしたてる。その際に「門谷のお婆ちゃん」はなぜ茂造が「早くこうなってしまった」のか、次のような自説を展開するのである。

この立派な老年哲学の前で、昭子にはもはや返す言葉がないどころか、むしろ学ぶことの方がずっと多かった。長い人生を歩いてきた人の智慧の集積をそこに見たように思った。頭使つて手足使つて動いていれば、呆けませんとも。彼女の結論は、これから老年に向う者にとつて、至高の教示であると言わねばならない。

「門谷のお婆ちゃん」は茂造の話を一般化し、「怠け者」が早くに呆けるのだと述べる。ここではこの話はこれ以上深入りされずに終わってしまうが、一方信利も同僚たちの飲み会の席で、三年前に退社した「榊原常務」の「耄碌ぶり」を聞かされる。

かなり飲んでいたので、一瞬にして彼らは酔いが醒めてしまった。榊原重役の社に在りし日を知る者にとっては青天の霹靂のような話を聞かされたからだ。あの躰が酒で壊れることはないだろう、と一人が言い、みんな青いた。激務から離れて突然隠棲したので、急激に老化したのだろうか、一人が、考え考

え、言った。(略)が、そういう中で経済的に安定している者が、
どうも呆けてきているらしいという結論になってきた。

信利と同僚たちの結論として、呆けの原因は経済的な安定である
ことが述べられている。同僚の一人が述べる「すると中小企業の自
転車操業と同じかね、人間の肉体というのは。働いているうちは夢
中でペダルを踏んで、楽すれば呆けるとなると、これは大変なこと
だな」という言葉は、明らかに「門谷のお婆ちゃん」の述べた「頭
使って、手足使って動いていけば、呆けません」という言葉と
響きあう。読者はこれを読み、現在の生き方そのものを問い直す必
要を感じるにちがいない。

このように本作には、老いることへの恐怖が随所にちりばめられ
ているが、一方で茂造が好意的に描かれていることに着目した
い。茂造は、老碌する以前は気難しい老人であったが、老人性痴呆
が進行するにつれて最後は「もしもし」しか言わず、「光るように
笑う」ようになる。こうした描写は、やがて「人格欠損」をもたら
す老いの進行を示した本作において、一見奇妙な印象を与える。し
かし、そもそも本作のタイトルは「恍惚の人」であり、茂造をその
ようにまなざす視点が本作では貫かれているともいえる。老人性痴
呆は確かに家族に苛酷な現状をもたらしたが、そうした中、昭子は
茂造を「恍惚の人」として好意的に「発見」するのである。その最
たる場面が、茂造が雨の中濡れることも構わず、泰山木の花を眺め
ている描写である。

雨だから、傘をさせばついで下を見て、泥にぬかるんだ道ばかり
眺めて歩くものであるのに、茂造は濡れることに頓着なく、傘

をかまわず上を向いて歩いて、雨の中で豪華な咲き方をしてい
る花を認めたのだろう。昭子は、胸を衝かれていた。泰山木の
花は、美しかった。(略)ともかく泰山木の花に心を奪われた
限りでは、茂造は確かに生きていと言えらるだろう。

「こんなにしてまで生きたいものかなあ」と周囲が思うほど老碌
してしまった茂造が「花に心を奪われた」ことに、昭子は茂造の
人間らしさを感じ、「確かに生きてい」と心を打たれたのである。
茂造が自然に心を奪われている様子は、他の場面にも描かれる。例
えば、庭での排泄の後「そのままの姿勢」でいた茂造は、昭子に「あ
あ昭子さん、月が綺麗ですよ」と言う。昭子は言われるまで気づか
なかつたが、「見上げると冬の夜空に皎々と皓い月が輝いていた」。
また、茂造の誕生祝に買ってあげたホオジロが鳴くたびに、茂造は
「見上げて、ニコッと笑っている」。茂造はこのホオジロを「飽きも
せずに終日」眺めて過ごしている。そのような茂造を昭子は子供の
ようだと言い、「子供って天使だと思つたものよ。お爺ちゃんがそ
れね。生きながら神になるってこれかしら」と捉えている。茂造の
「すっかり子供に還ってしまっている」様子は、一時的にせよ家族
に「平和」や「感動」をもたらす。気難しい老人であった茂造は、「小
鳥と花とオルゴール」に囲まれ、「おだやかに微笑」する「恍惚の人」
となったのである。このような茂造を見たことは、昭子にとつての
発見であった。そしてそのような昭子の茂造へのまなざしを通して、
読者もまた「呆け老人」が「恍惚の人」であることを「発見」する
のである。

昭子を中心的な視点人物と設定し、一方的に被介護者をまなざす

本作に対しては、その描写方法に關しての批判も多い。茂造を「恍惚の人」としてまなざすのは昭子であり、「老人その人の心の内側から見返す視線をこの小説は持つていない」という批判や、茂造をこのように描いたところで「被介護者（介護される人）の主体性を理解したわけではない」という指摘がある。確かに、茂造を「生かせるだけ生かしてやろう」と考える昭子の決意は、現実の介護の実態を示したものとまでは到底いえない。茂造を看取り、涙を流す昭子の姿が描かれる美しい場面でも幕を閉じる本作は、「介護小説」としては一面的なものでしかないだろう。しかし、本論では、本作の老いの描写を別の観点から考えてみたい。すなわち、「今の日本が老人福祉では非常に遅れていて、人口の高齢化に見合う対策は、まだ何もとられていない」と述べられる、作品の同時代において、老いの「発見」を詳細に描くことにはどのような意味があったのかということである。次節において見ていくように、周縁に眼を凝らし、老人や貧困や被差別者たち、描写の対象を拡大させる方法は、従来の歴史叙述からの脱却を図った「民衆史」「社会史」をめぐる歴史学の新しい方法でもあった。

三、戦後歴史学と「恍惚の人」——「鳥島」は入っているか

有吉が小説執筆をはじめた一九五〇年代は、史学史においては、戦後歴史学のパラタイムチェンジがなされた時期とみなされている。「事実」をいかに書くかという問題は、近代歴史学の成立以後、それぞれの過渡期において浮上してきた問題である。しかし、

一九五〇年代のそれは戦後意識の終焉が唱えられ、歴史学が大きな路線変更を迫られる時期であったと捉えられている。戦後歴史学への違和感は、やがて一九六〇年代前後に「民衆史研究」へと方向を変え、より対象を広げた「社会史研究」へと発展していく。これまでに叙述の対象とされなかった「民衆」を主体と認識したうえで、「民衆」の世界を描くことを目論んだものである。こうした認識は歴史学にとどまらず、文学にも影響を与え、「ルポルタージュ」「ドキュメンタリー」「生活記録」「生活綴り方」など、「出来事」の叙述方法を巡る様々なスタイルを生み出していった。¹⁶⁾ここでは、「事実」を叙述するにあたって、当事者の立場に立つということが重視される。その点において、歴史学における「民衆史研究」とも共鳴するものであった。しかし一九六〇年代以降、こうした歴史叙述がはたして「当事者」あるいは「周縁」に対するまなざしを持ち得ていたかを問う、戦後歴史学の自己点検が始まる。この自己点検は、「当事者」意識をその出発点とした「民衆史研究」の担い手によって主になされてきたという特徴がある。そうした言説を今日に至るまで積極的に発信している人物として、鹿野政直を挙げることができよう。本論では、鹿野の描いた歴史学の見取り図にしたがって、「恍惚の人」の書かれた歴史性を考えてみたい。

「戦後歴史学はこれでもいいのかとの気がめばえたのは、一九六〇年代のことである」とはじまる「歴史学の自己点検」において、鹿野は周縁へのまなざしの例として、鳥尾敏雄の一連の「ヤポネシア論」を挙げている。鳥尾の「たとえば奄美の地図を書く時に、徳之島の西の方の鳥島を落としていても平気だ」という気持ちを

なくしたいのです」「日本の歴史の中であるいは日本人の中で、はじっここのほうだから、落としていいというふうな考え方を是正して行かなければならないと考えるわけです」という提言は、鹿野にとって「一つの啓示となった」という。鳥尾の提言を踏まえ、鹿野は「わたくしたちの歴史学には、はたして「鳥島」は入っているか」と問題提起を行う。それは「はじっここのほうだから、落としていい」と「斬り捨てることで成り立ってきた、近代歴史学に対する痛烈な「自己点検」であった。

鹿野は、従来とは異なる対象を描いた歴史叙述を「民間学」と名付け、柳田国男をはじめとした「一九一〇—二〇年代の学問から抽出したこういう学問の系列」に「民間学」を見出している。しかし、鹿野の関心は過去の「民間学」ではなく、彼が歴史に向き合っている「いま」である。その点について、鹿野は「わたくしがその概念を思いついた一九七〇年代以降の今日は、おそらく民間学の第二の盛行期」としたうえで、その理由を次のように述べる。

一つは、七〇年代以降、科学の進歩が人類に何をもたらしてきたか、またもたらしつつあるかとのかたちで、既往の学問の内包する加害性が、直視され始めたことである。どの学問も自己検証を避けえなくなった。(略)しかしより根本的にいま一つは、近代百数十年をへて、目標としてきた文明が達成された反面で、その文明のもつ病弊が、自己を捲き込みかたちであまりに多量にまた多方面に、蓄積され噴出し、人びとが、みずからの学習を通しての改革を迫られたせいであろう。

鹿野の整理によると、一九七〇年代を通じて「歴史を視る眼とい

うもののひそやかな移動²⁰⁾があったという。一九七〇年代は、「戦後」への記憶の国民的な規模での喪失時代」であり、戦後日本が目指してきた「強者」としての「文明」を達成した時代であったという。そうした中で、六〇年代から七〇年代初頭のヴェトナム戦争は、「文明そのものを問いなおそうとする姿勢」の契機となったとする。とりわけ鹿野は、ジャーナリスト本多勝一『殺される側の論理』（一九七二年二月、朝日新聞社）を歴史学において転換をなした重要な著作と位置づけ、この著作以降、日本人は「する」側から「される側」の視点を獲得していったと見る。「それは、いうところの、弱者への視野の拡大であるとともに、彼らが、弱者であるゆえに獲得している、強者」≡文明をこえる立場の発見をも意味した」というように、そのまなざしは叙述の対象を拡大させることになり、歴史学にとどまらず、新たな視点が獲得されていった。鹿野は、この新たな視点の向けられた対象として、「一つは「公害」であり、いま一つは「戦争」であった」としているが、ここに鹿野が「民間学」と呼ぶところの対象まで含めると、その対象は幅広いものであったことがわかる。「弱者」へのまなざしは、「社会的弱者」に対する「差別への感覚」を生成させ、「マイノリティ」の歴史はその対象を拡大させていった。その拡大の有様を、鹿野は次のように述べている。

差別への感覚が、マイノリティ・グループ中のマジョリティともいふべき被差別部落の位置への認識から始まり、女性や沖縄へのそれをへて、マイノリティ中のマイノリティといふべきアイヌやウイグルにいたり、最後に障害者・病者に及んだという点も、見逃されるべきではないだろう（民族問題としての在日

朝鮮人問題も、その一翼をかたちづくった。

「差別への感覚」は「被差別部落」から「女性」「沖繩」「アイヌ」「ウイルト」へと広がり、最後には「障害者」「病者」へと及んだという鹿野の述べる「民間学」はこうしたマイノリティの問題にとどまらず、「環境・子供・家族・病者・生と死・異文化・戦争・アジア・マイノリティ等々の問題が、日常のなかへ否応なくのしかかっている」と、それへの答え、少なくとも問いの自覚を必須とし、そこから無数のネットワークを通じての民間学の造型が始まっている」と述べられている。

このように見てきたとき、まさに「歴史を視る眼」というもののひそやかな移動」のあった、一九七〇年代に書かれた「恍惚の人」は、マイノリティであった毫碌した老人を「恍惚の人」として「発見」した点において、鹿野の述べる「民間学」の延長上に位置づけられるものであると考えられる。もちろん「恍惚の人」は小説ではあるが、作中に示される情報はリアリティをもって読者へと伝えられる。その一例が、医者の口を通して語られる医学的認識である。信利の会社にある内科医によると、老人性痴呆は「文明病」であるとされる。それに対し、昭子は「どうして文明病なのかしら。文明が発達して平均寿命が伸びたのと同様があるの？」と言い、信利はこの言葉に大きな衝撃を受ける。また、地域の福祉事務所にいる老人福祉指導主事の女性は、茂造を施設に預けたいという昭子に対し、「立花さん、老人性鬱病というのは、老人性痴呆もそうですが、老人性の精神病なんです。ですから、どうして隔離なさりたいなら、今のところ一般の精神病院しか収容する施設はないんです」と「正確な知識を

披瀝」する。このように作中には医者や福祉事務所といった、介護問題に対する「正確」な知識を有すると思われる人物たちの口から様々な専門用語が語られ、それがリアリティをもって読者に伝わるという仕掛けになっているのである。そして、昭子が持つに至った認識―「今の日本が老人福祉では非常に遅れていて、人口の老齢化に見合う対策は、まだ何もとられていないということ」を読者も実感することになる。「精神病」としての「恍惚の人」を描くことは、鹿野の述べる「障害者」「病者」へと叙述対象が広がっていく状況と重なり合っている。「恍惚の人」が現実世界を動かすまでに、リアリティを持ちえた要因として、有吉自身が老年学について、作品執筆時にかなり学んでいたという事情がある。有吉自身、自身の老いを自覚したことが、本作の主題を「老い」に設定したことの原因だとした上で、作品化のため、「専門書を読み、施設を訪れ、外国旅行でも特殊な病院ばかり歩きまわっていた」ことを述べている。「恍惚の人」は「小説」であるが、そうした「事実」を扱う態度においてもまた、歴史叙述との同一性を考えることができるだろう。「恍惚の人」は、痴呆老人という「障害者」の物語であり、後に述べるように「女性」の物語でもあった。そのまなざしは、現在から振り返れば、一面しか見えていない、不完全なものだったかもしれないが、作品発表当初においてはたしかに新しい「発見」だったといえる。有吉の関心のあり方は、話題になりそうなトピックをとりあえず並べたという「感覚」に基づいたものではなく、「弱者」「当事者」を描くという同時代における歴史的な関心のあり方に呼应したものである。「恍惚の人」は、同時代にもたらされた「老い」と

いう新しい現実を描いたという点において、現代の社会をどう描くかという、現代史叙述の問題とも照応した、全く新しいエクリチュールを切り拓いているのである。

四、島々へのまなざし

後年、有吉は自身の創作態度について、「ハストリアン」という言葉を用いつつ、次のように述べている。

英語には歴史History に対する造語としてHerstory という言葉が定着しています。これを「女性史」として訳すのは間違いで、正確には「女性の側から見た歴史」という意味です。(略)私の念願は、読者をぞくつとさせるハストリアンでありたいということかしら。男が書きもらしているところを、女が書き改めなくてはいけないという意識は常に持っています。⁽²³⁾

ここで述べられているように、有吉の書く「歴史」とは「女性の側から見た歴史」ということであり、「男が書きもらしているところを、女が書き改めなくては」という意識に基づいている。この言葉通り、有吉作品では「女性の側から」「弱者」が描かれ、「障害者」としての痴呆老人が描かれているわけであるが、一方でその茂造をまなざす昭子もまた、「女性」という「弱者」としてまなざされている。しばしば指摘されることではあるが、介護の問題はその家族の問題であり、とりわけその家族の主婦の問題として回収される。⁽²⁴⁾「恍惚の人」には、老人福祉の役人と昭子の間で交わされる

会話において、そうした認識がはっきりと示されている。

「本当に、老人問題は今のところ解決の見通しというのはないくらい深刻なんです。家庭崩壊が起りますすね。主婦の方に、しっかりして頂くより方途がないんです」

老人は施設ではなく、家庭で面倒を見るのがベストであるという価値観が示された上で、その責任は「主婦」にあるという認識が語られている。この「主婦の方にしっかりして頂く」という認識は、昭子に不満を感じさせるところか、逆に使命感を与える役割を果たす。昭子は、自身の生活と介護に追われ、茂造に対し様々な感情を持つが、最終的には「今までは茂造の存在が迷惑で迷惑でたまらなかつたけれど、よし今日からは茂造を生かせるだけ生かしてやろう。誰でもない、それは私がやれることだ」という使命感を持つにいたる。それは茂造のためではなく、自分のためである。だからこそ、茂造がお風呂で溺れ、死にかけた時にも「この半年間の昭子の悪戦苦闘が、結果としてまるで無意味になつてしまつてはないか」と考えるのである。

昭子のこうした思考回路は、女性が働くということについても同様である。例えば、昭子は「信利の属する世代の男性が持っている女性観には牢固として抜き難い封建色がある」とし、妻が働きに出る現状に対し「寛容と忍耐をもって臨んでいると思ひこんでいる」夫たちに「考え方の行き違い」を感じている。しかし、そうした「行き違い」は女たちにもまた問題があるのだと見ており、「働いていることが夫に対する遠慮となり、夫の稼ぎに不満があつて仕事をしているのではないという信条を自らに課している」と分析している。

このように、共働き家庭における問題について、女性側の不満を的確に描き出しつつも、昭子はその不満を発露しようとはしない。「そういう自分たちの状態をときに苛立たしく思うのだけれど、さてどうすることも出来ないで二十年を過してきた」と述べられるのである。そうした態度は仕事に対しても同様であり、勤務先の法律事務所において「果してきた役割はそんなに小さなものだとは考えていない」にも関わらず、それを夫に理解してもらおうとはしない。むしろ、昭子には共稼ぎをしていることから生み出された明確な「家政方針」があり、最新の電化製品を使いこなして、「家庭も職業も両立」することを自らに課しているのである。

昭子は、一見すると古風であり、従来の女性に対する価値観から抜け出せていないように見える。こうした伝統的な女性像は、有吉作品に共通する一つの題材でもある。『紀ノ川』（一九五九年六月、中央公論社）における花や、『華岡青洲の妻』における加恵や於継など、様々な女主人公が想起できるだろう。ただし、小説の登場人物が伝統的な価値観を持っているからといって、有吉自身が女性の地位向上に無関心であったわけではない。一九七九年には、フランスのフェミニスト、ルノワット・グルー『最後の植民地』（一九七九年四月、新潮社）を共訳している。本書に、有吉は「抑圧され、従属し、孤立した女性が解放されるべき『最後の植民地』』という意味を込めたという。そして、本書を「ウーマン・リップの書物ではないけれど、読めばウーマン・リップを理解できる」とし、「ウーマン・リップという一つの社会現象」が「なぜ起こらなければならなかったのか、その本質はなんなのか」を「わからせてくれる」本

であると評価している。^⑤「過激」に「わめき立て」るのではなく、「本質」を理解することが重要だという考えは、有吉の考える「男女平等」にも見ることができるといえる。

私は男性優位思想ある限り、女性優位論も存在すべきだと思っ
それでバランスがとれるのだから。人々は、それらを知って初
めて男女平等というのが、穏当で中庸的でノーマルな考え方だ
ということに気がつく筈である。^⑥

自らを「ハストリアン」と位置付けていたように、有吉は小説を執筆する際「女性の側」から「書き改める」ことを何よりも重視していた。女性に対する「差別」を解消していくためには、女性の現状を知って「バランス」を取っていくことが重要である。昭子は自身の置かれている現状について、地位向上を「過激」に「わめき立て」はしない。しかし、昭子のそうした態度は、多くの女性たちがとらざるを得なかった生き方でもある。有吉の描く伝統的な女性像は、女性がこのようにしか生きられなかった有様を、率直かつ力強く描き得ているのだといえる。

有吉の「周縁」へのまなざしと考えたとき、『恍惚の人』と並んで社会派小説と位置付けられる『複合汚染』もまた、同一の関心から生み出されたものであると考えることができる。先に引用したように、「される側」の視点を獲得した歴史学が、まず対象としたのが「公害」であったという鹿野の指摘を想起したい。公害は、「高度経済成長の象徴というべき重化学工業の急速な進展の結果、もっとも明瞭に人びと（＝われわれ）の眼に映じるようになったあらたな矛盾^⑦」であり、戦後歴史学において早急に検証すべき対象であっ

た。有吉は「あとがき」において、文学者として「日本文学古来の伝統的テーマであった「花鳥風月」が危機にさらされている」現状を、「一人でも多くの人」に知ってもらうために本作を書いたという。そのため、本作の目的は「告発」でもなければ「警告」でもないと述べられる。作中、「どの専門家もその分野において日本の現状に対する危機意識を持っていられたから、小説という通俗的な手法で多くの人に知識がひろまることを想定し、(多分)それを願って(だろう)、私以上に熱心に教えて下さった」とあるように、「複合汚染」は「公害」の実態を「素人」の「私」が調べていくというスタンスで描き、かえってそうすることによって、環境汚染の現状を生々しく読者に伝えることに成功したのである。

さて、こうした有吉作品における「弱者」へのまなざしを踏まえるならば、本論冒頭に挙げた『日本の島々、昔と今。』の新しさも見えてくる。北から南まで「出かけて行って実際に島を見る」という有吉の態度には明らかに日本の「辺境」へのまなざしがある。「その根本にある問いは、この海に囲まれた日本はどこまでなのか、というネーション(国民)の土地という問題である」と指摘されるように、島々の歴史を描くことは、どこまでを「日本」と捉えるかという同時代的な問題でもあった。その中で、有吉は「海は国境になった」という現実を「発見」し、その「国境」を見定めるため、離島に出かけ、見て、物語るのである。「南の果て」「西の果て」と表現される離島の「昔と今」は、有吉にとって必ず描かれなければならない題材であった。その問題意識は、南島を再発見させた島尾敏雄の「島島を落としても平気だ」という気持ちをなくしたい」と

いう提言とも通底する。有吉にとって、島々の歴史は女性の歴史であり、差別の歴史である。

注

(1) 大河晴美「研究動向 有吉佐和子」(『昭和文学研究』二八、一九九四年二月)

(2) 羽矢みずき「才女」時代―戦後十年目の旗手たち(加納美紀代編『リブという革命―近代の闇をひらく』二〇〇三年一月、インパクト出版会)

(3) 一九七四年十月から七五年六月まで、「朝日新聞」に連載。七五年四月「複合汚染」上巻、七月に下巻を新潮社より刊行。

(4) 『新潮日本文学アルバム71 有吉佐和子』(一九九五年五月、新潮社)

(5) 『新潮日本文学アルバム71 有吉佐和子』(一九九五年五月、新潮社)

(6) 宮内淳子「父親のいない幸福―『香華』『芝桜』」(『有吉佐和子の世界』二〇〇四年一〇月、翰林書房)は、阿川弘之ら当時の男性作家の有吉評価に触れ、「彼らと有吉の間にある文学観の違いは、文学を超俗なものとして特権化するかどうかであり、それが、小説に物語性を認めるか否かにも関わってきた。かつて有吉が文士たちに私ならいくらでも書けると言ったのは、書けない書けないと連呼することが文学への忠誠であるかのように言いつのる彼ら、一文士の共同体の中に安住している者たちへ向けた、彼女一流の皮肉だったのではないか」と指摘する。また、大越愛子「最後の植民地」への連帯のメッセージ(『前掲』『有吉

佐和子の世界」は、「個別的私的レベルで彼女が取り上げた問題は、すでに公的レベルへと回収され、先駆的に提起した彼女の功績は忘れられている感がある」とした上で、歴史的に有吉の先駆性を考えるべきであると提言している。

(7) 有吉佐和子『「恍惚のひと」について』(波)一九七二年・二月、引用は『作家の自伝100 有吉佐和子』(二〇〇〇年一月、日本図書センター)による。

(8) 森幹郎「解説」(『恍惚の人』一九八二年五月、新潮文庫)

(9) 小柳治宣「介護文学にみる老いの姿」(二〇〇六年一月、朝文社)

(10) 鈴木志郎康「『恍惚の人』極私的批判」(『新日本文学』三〇五、一九七三年一月)

(11) 米村みゆき「高齢社会の「解釈」を変える 有吉佐和子『恍惚の人』と〈現実〉の演出」(米村みゆき・佐々木亜紀子編『介護小説』の風景―高齢社会と文学』二〇一五年五月、森話社)

(12) 前掲、米村みゆき「高齢社会の「解釈」を変える 有吉佐和子『恍惚の人』と〈現実〉の演出」は『恍惚の人』のこうした特徴を「情報誌的」と表現している。

(13) 石田仁志「『恍惚』の奥にあるもの―『恍惚の人』」(前掲、『有吉佐和子の世界』)

(14) 杉田智美「管理される「老い」／監視される「主婦」―一九六〇年代『瘋癲老人日記』が語る介護」(前掲、『介護小説』の風景―高齢社会と文学)

(15) 成田龍一は、「民衆思想史研究の誕生ということ考えたとき、鹿野政直と安丸良夫にとって、まずは戦後歴史学を受容とそれへの違和

感が出発点になる」とし、色川大吉『明治精神史』がその後の民衆思想史研究にもたらした影響について指摘している。(『民衆史・民衆思想史研究の史学史』『歴史学のナラティブ―民衆史研究史とその周辺』二〇一二年六月、校倉書房)

(16) 岩上順一は「記録文学」について「労働者、農民ばかりでなく、一般市民大衆が、自己の過去、現在の生活実情を記録し、報道し、通信したがつてゐることをものがたつてゐる」ことを背景としている。(『記録文学について』『新日本文学』一九四六年創刊号)

(17) 鹿野政直「歴史学の自己点検」(『鳥島』)は入っているか―歴史学の現在と歴史学』一九八八年一月、岩波書店)

(18) 一九六二年六月一三日に鹿児島県大島郡市町村議会議員研修会で行った講演「私の見た奄美」(『島尾敏雄全集 第十六卷』一九八二年一月)

(19) 鹿野政直「民間学」とは何か」(『化生する歴史学―自明性の解体のなかで』一九九八年二月、校倉書房)

(20) 鹿野政直「戦後」意識の現在」(前掲、『鳥島』)は入っているか―歴史学の現在と歴史学』、以下、ことわりのない鹿野の引用は本論による。

(21) 前掲、鹿野政直「民間学」とは何か

(22) 前掲、有吉佐和子「『恍惚のひと』について」

(23) 有吉佐和子「ハストリアンとして」(波)一九七八年一月、引用は前掲『作家の自伝100 有吉佐和子』による。

(24) 上野千鶴子は「『恍惚の人』が『普通の介護』を書いたことに着目し、『介護をめぐるジェンダー規範(介護は女がするもの)』を、有吉さんは

疑っていないように見える。」と指摘している。(『上野千鶴子が文学を社会学する』二〇〇〇年一月、朝日新聞社)

(25) 有吉佐和子「男性社会の中で」(『波』一九七八年一〇月)、引用は前掲、『作家の自伝109 有吉佐和子』による。

(26) 有吉佐和子「訳者あとがき」(ブノワット・グルー著 有吉佐和子／カトリヌ・カドゥ訳『最後の植民地』一九七九年四月、新潮社)

(27) 前掲、鹿野政直「戦後」意識の現在」

(28) 富岡幸一郎「特集没後30年、いま甦る有吉佐和子の「眼差し」」(『SAPIO』二〇一四年九月)

【付記】有吉佐和子の作品引用は、『恍惚の人』(一九八二年五月、新潮文庫)、『日本の島々、昔と今』(二〇〇九年二月、岩波文庫)、『複合汚染』(一九七九年五月、新潮文庫) によった。引用部の傍線は稿者による。